

験的に検討したところ、指示を与えた場合には、自我の弱い者は、自我の強い者より早い step で反応し、また、自我の強い者は Interval が長い場合に、自我の弱い者は逆に Interval が短い場合に、早い step で反応することが示された。

309 人格特性評価における社会的一致性の研究

岡村 浩志(日本大学)

パーソナリティテストの項目を社会的な望ましさ(SD)の観点からみれば、SD に一致する集団と一致しない集団がある。そこで、両者の間に質的な差があるかどうかを検討する。結果として、SD に一致する集団からステレオタイプな評定傾向がみられた。また、SD に一致しない集団を不適応とするのは、問題を残す。

310 CAT による幼児の依存性と攻撃性に関する研究 (2)

○丸井 澄子(岐阜大学)

大山 雍子(仙台市精神衛生相談所)

幼児の対人関係における攻撃的傾向をしらべるために、男女児 30 人づつを被験者として CAT を施行し、反応を Stone, H. の方法によつて整理してみた。カード別では 7 と 3 とに男女児の比較では男児に攻撃的反応が多く、カテゴリー別では、表面的行動による表現が多い。また男女児ともに母との情緒的結合が強い。

311 Q-technique による Self-concept の研究 (第 3 報告)

藤原 喜悦(東京学芸大学)

学業不振の中学 2 年生 13 名(男女 4 名、女子 9 名。教室における一斉授業についていけないもの。ただし、精薄を除く。)に、現実自我および理想自我について 2-sorting (forced distribution による。)を行なわせ、その相関係数を偏差積法により求めたところ、その大部分のものが、ほとんど相関を示さないことが明らかにされた。

討 論 の 概 要

部会の特徴

この部会では 5 つの研究発表が行なわれた。これらの研究は共通して Projective test とか Inventory を使用しているが、それぞれ異なったねらいがあつたので討議は 4 つの群にわけて行なわれた。先ず、小川(307)と吉田(308)は自我の強弱と認知機能の関連についての研究であつた。前者は TAT と Inventory との関係に

ついてであり、後者は Intolerance of Ambiguity との関係についてである。岡村(309)は広く行なわれているパーソナリティ・テストを「社会的に望ましい」という観点からみなおそうとした。丸井ら(310)は CAT による幼児の攻撃性の測定についての研究であつた。最後に、藤原(311)は Q-technique による Self-Concept の研究であつた。この中で、部会での討議がもつとも活潑であつたのは、第 1 群の小川、吉田らの研究であり、この種の問題の不明確さを示したものと云えよう。この部会での大よその流れとして 2 つのものがあつたように思われる。1 つは自我の強弱とパーソナリティの関連、あるいは自我とプロジェクト・テストにあらわれるものの関連であり、2 番目は質問紙の結果にあらわれたものをいかに処理するかという問題であつたが、いずれも問題を数多く含んでいることの表れと思える。

自我の強さと認知機能

小川は TAT とインベントリーとの間に反応の差があり、欲求特性によつてその表れ方が異なることをのべたが、藤丸(金沢大)はプロジェクト・テストとインベントリーとの間に相関があるのかないのかと質問したのに対して、どちらともいえないと説明した。小川が求護欲求は社会的依存であり、社会に容認されない欲求であるとのべたことについて、星野(国際キリスト教大)は求護欲求を社会的依存と考えてよいが、社会的に容認されない欲求というのはおかしいと反論した。また、星野は自我に脅威をあたえることがプロジェクト・テストに出るというが、そうすれば自我の弱いものは出ないのかと質問したのについて、小川は自我が強くなければ投影にでないものであり、いわば投影法は自我機能の強さを測るものと考えてよいとのべた。これについては数多くの意見が集中した。吉田は自我の強弱と曖昧な図形の認知との間に関連があるとのべたが、これについてはいくつかの意見が出たので吉田は更に、曖昧なものを正確に認識できるのは自我の強さの 1 つの指標であり、これは小川の研究と同様に曖昧な刺激も自我の強いものはつきりと判定できるのでであると付け加えた。藤原は自我の強さ、弱さはパーソナリティの中核と関連しているため Self-concept と Ego-function の関係をよく検討しなければならぬのではないかと提案した。このように自我の強弱と投影法の表現度合の関連について討議が進んでいった。

人格特性評価における社会的一致性

岡村は人格特性評価において望ましいパーソナリティが操作的に作り出され得ることをのべたが、この結論を